HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シンポジウムを終えて（コメント）
Author(s)	辻, 智子
Citation	子ども発達臨床研究, 6, 73-74
Issue Date	2014-12-05
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.6.73
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57575
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12203623_06_73-74.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

シンポジウムを終えて（コメント）

辻　　智　子*

「発達」概念の含意を検討する意図で企画された本シンポジウムは、その表題に「development」を掲げることで、より多角的な議論を可能にしたと言える。当日の報告は各自の研究領域における文脈と問題関心に引き寄せながら行われたが、「発達」「発展」「開発」「development」というキーワードが共通の土台となって議論が広がっていった。本稿は、これらのキーワードとその相互関係への関心から、言葉の意味と使われ方に着目して若干の補足的なコメントを加えることとしたい。

本シンポジウムにおいて「development[1]」を言い換えた日本語は、個人について見る時に「発達」が、社会について見る時に「発展」「開発」が用いられる傾向があった。ところで、「development」と「発達」が明確に結びついたのは明治 20 年代頃と目される[2]。心身の発育成長を表す「発達」に加え、学問や社会の進歩の意味が加わったのも同時期と見られる。その後、学術用語としてより限定的に使用される一方、一般的な用法としては個人・個体や心身のみにとらわれない使用も少なくなく（歴史・社会・学問・産業の発達など）、そこでは進歩や発展との親和性から「優れた」「よりよい」変化が示唆されてきたと言える。とはいえ、教育学研究と心理学研究で見た限りでもその用法に幅が見られるように、より広い文脈で見れば「発達」それ自体も多義的な言葉のように思われる。では、「発達」と「開発」との関係はどうであろうか。「開発（かいほつ）」の語は日本では平安時代から用法があるといわれ、広く「ひらく」の意、また「新シク地ヲ開キ発（オコ）シテ田畑トスルコト」（開墾）を指すとされてきた[3]。「発達」に先んじて明治 5 年に「develop」、明治 19 年に「development」への訳を見出せる[4]。明治 20 年代になると「かいはつ」とも読んで「注入主義」の対語として「知識ヲ自然ニ自己カラ発（オコ）シ開クヤウニスル」「人智ヲ導キテ、自ラ発達セシムル、教授ノ一法」の意も加わったとされる。後に見られる「能力開発」「自己開発」はこの用法といえる。内発性を印象づけるこれらの用法は、しかし用いられる文脈によって異なる意味と様相を持つ点にとりわけ注意が必要である。他方、近代化の過程において経済的・社会的側面での「開発」が引き起こしてきた諸問題を踏まえ「開発」概念自体を根底的にとらえなおそうとする動向が近年顕著である。「環境を改変しながら存続」してきた人類誕生以来のいとなみを「開発」と定義しなおそうとの試み[5]、地域の土着文化や宗教思想のなかの「開発」[6]、「development」に相当する土着思想の探求、内発的発展の源流探索とオルタナティブな「development」の内実を描く作業、「ポスト開発」「脱成長」の提起などである。「開発」もまた文脈に応じて多義的であることを加味して、これらの言葉の用法と概念との相互関係を見ると何が見えてくるか、また、「発達」概念を多角的に再検討しようという試みにおける基礎的な作業としても探求してみたいところである。

注

[1] development の語源には，de＋envelop から，包み込まれていたものが解き放たれる，潜在していたものが徐々に姿を現してくる，の意があるとされる（*Oxford Dictionary of English*, Oxford University Press (2005)）.

*北海道大学大学院教育学研究院

田中昌人『人間発達の理論』（青木書店，1987 年）も参照．

[2] 惣郷正明・飛田良文『明治のことば辞典』（東京堂出版，1986 年）によれば，『哲学字彙』（明治 14 年）で「発達（はつだつ）」は「growth」のみ，『漢英対照いろは辞典』（明治 21 年、はつたつ）・『和英大辞典』（明治 29 年、Hattatsu）に「to be developed」「development」が登場する．

[3] なお中国の古典では，「封を切る」「閉じていたものを開く」「知識をひらきみちびく」などの意味とされる．

[4] 前掲，惣郷・飛田 1986 年（『和英語林集成〈再版〉』明治 5 年，『和英語林集成〈三版〉』明治 19 年）．他に，大槻文彦『大言海（新編）』（冨山房，1956 年）も参照．

[5] 『岩波講座開発と文化 1　いま，なぜ「開発と文化」なのか』岩波書店，1997 年，ｖ頁．

[6] 西川潤・野田真里編『仏教・開発（かいほつ）・NGO ── タイ開発（かいほつ）僧に学ぶ共生の智慧』新評論，2001 年他．